

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

「イスラム化」の飽和と今後の展開

塩崎悠輝（同志社大学神学部助教）

マレーシアにおいて「イスラム化 (Islamization)」とは、1970年代から現在に至るまで続いている社会、あるいは行政の変化として理解されることが多い。マス・メディアにおいては、非ムスリムから見た懸念材料としてもしばしば言及される。

ここでは、「イスラム化」の現状と今後予想される展開を論じるが、そのために「イスラム化」とは何か、を明確にしておく必要がある。「イスラム化」とは、「イスラムの教義 (= シャリーア) に従うために個人の生活や社会、国家、あるいは学術にイスラム的価値を反映すること」と定義できるが、実際には様々な利権や政策に大きく左右される。

「イスラム化」は社会における「イスラム化」と行政による「イスラム化」に大別することができる。

「社会におけるイスラム化」は、19世紀末以降、交通手段の発達、印刷技術、中東（特にイエメン）からの移民、中東への留学といった要因で進行してきた。中東のイスラム諸学の潮流が輸入され、教育を通してイスラム諸学の知識が向上し、実践に結びついていった。

「行政によるイスラム化」は、20世紀初めから「社会のイスラム化」と密接に影響しあいながらモスクの管理、喜捨の徴収、巡礼といったイスラム行政や教育の分野で進行してきた。



1970年代から急速に増加したイスラム幼稚園の児童たち（筆者撮影）

行政による「イスラム化」の背景には政治的競争があった。つまり、1980年代以降は最大与党・統一マレー国民組織 (UMNO) が同じくマレー人の野党で「イスラム国家」を目標とする汎マレーシア・イスラム党 (PAS) とイスラム的正統性を競い、有権者の支持をつなぎとめようとしたことが最大の推進要因であった。

マハティール政権はPASの主要な基盤であるイスラム教育を管理統制しようとした。その結果、PAS

の支持基盤は従来の私立イスラム学校よりも都市部中間層のマレー人の比重が大きくなった。1970年代から増加した都市部中間層のマレー人に起きた「社会のイスラム化」がPASの都市部での支持基盤拡大を可能にした。行政および社会の「イスラム化」の結果として、UMNOとPASの政策や支持基盤の差異は縮小し、UMNOとPASが対立する理由もわかりにくくなってきた。

2008年の総選挙直後、マレー人の間でUMNOとPASの連立を画策する動きが見られた。結果的には連立は成立しなかったが、行政による「イスラム化」が両党の争点ではなくなる中で、両党の連立が望ましいという主張は今後も現れると考えられる。

UMNOによる「イスラム化」はこれまで1970年代以降のハラール認証やイスラム金融といった非ムスリムの利害を極力損なわない範囲で進められてきたが、今後は連立の組み換えも視野に入れながらさらなる「イスラム化」を進めるのか、岐路にあるといえる。



今後与野党との関係で難しい舵取りを迫られるPAS指導部（筆者撮影）

< 筆者紹介 >

1977年、愛媛県生まれ。同志社大学神学研究科博士課程修了。博士（神学）。在マレーシア日本国大使館専門調査員を経て現職。専門は東南アジアのイスラム、特にイスラム法。イスラムの教義に関する質問への回答（ファトワー）や法学書を分析することを通して、中東や南アジアから東南アジアへのイスラム法学の影響を明らかにしてきた。イスラムの知のネットワークが国家や社会の変容に影響する過程が主な研究テーマである。共著書に『マイノリティ・ムスリムのイスラム法学』（塩崎悠輝編、2012年、日本サウディアラビア協会）など。